



「朝鮮半島南部の移住漁村『日本村』に関する調査研究」

科学研究費による基盤研究 A (研究代表 崔吉城)

<p>ニュース・レター No. 4</p> <p>発行日：2008年7月1日</p>	<p>釜山国際シンポ 東アジアの植民地主義</p> <p>2008年7月19日21日 釜山・朝鮮ビーチホテル</p>
<p>プログラム</p>	
<p>7月19日(第一日目) 13:00 代表者開会の挨拶 崔吉城 (東亜大) 植野弘子 (東洋大)</p> <p>13:20 第一部 「文化」 司会 笠原政治 (国立民族学博物館)</p> <p>① 山路勝彦 (関西大) 13:20 「植民地博覧会研究の方途」</p> <p>② 崔錫榮 (公州大校) 13:55 「朝鮮博覧会と近代的知の誕生」</p> <p>コメント 松金公正 (宇都宮大) 14:25</p> <p>③ 上田崇仁 (愛知教育大) 15:00 「植民地朝鮮・『国語』教育に見られる特徴」</p> <p>④ 上水流久彦 (県立広島大) 15:35 「自画像形成の道具としての日本/日本語」</p> <p>コメント 山田寛人 (広島大) 16:05</p> <p>17:40 映像鑑賞会 (19:00) 北村皆雄 (ビジュアルフォークロア) 「韓国巨文島～62年目のにっぽん村～」コメント：李文雄 (ソウル大)、全京秀 (ソウル大)</p> <p>19:30 懇親会 司会 上田崇仁 (愛知教育大)・中村八重 (世明大) 祝辞：崔光植 (韓国国立中央博物館長)</p> <p>7月20日(第二日目)</p> <p>9:00 第二部 「漁業」 司会 三尾裕子 (東京外国語大)</p> <p>① 西村一之 (日本女子大) 9:00 「台湾における漁民の移動と漁撈技術」</p> <p>② 金秀姫 (金泉大校) 9:35 「明治期における日本人の朝鮮出漁と漁村建設」</p>	<p>③ 木村健二 (下関市立大) 10:10 「明治期日本漁民による朝鮮進出の背景」</p> <p>コメント 藤井賢二 (姫路高等学校) 10:45 討論 (11:05 12:00) 13:00</p> <p>第三部 「移動」 司会 植野弘子</p> <p>① 磯永和貴 (東亜大) 13:00 「熊本県の朝鮮・台湾移住者」</p> <p>② 鈴木文子 (仏教大) 13:35 「朝鮮からの引き揚げ者」</p> <p>③ 黄智慧 (台湾・中央研究院) 14:10 「台湾引揚者のポストコロニアル状況について」</p> <p>コメント 李鎮榮 (名桜大) 14:40 16:15 総合討論 「植民地主義研究の展望」 司会 末成道男 (東洋大)</p> <p>① 原田環 (県立広島大) 16:15 ② 何義麟 (台北教育大) 16:30</p> <p>休憩 (17:15 17:30) 討論 (17:30 18:45)</p> <p>7月21日(第三日目)</p> <p>エクスカージョン (希望者のみ) 9:00 12:00 東萊温泉、金井公園 (皇紀二六〇〇年記念石碑)、 日本人墓、旧日本人住宅街 費用 3,000円程度 (各自自費)</p>

崔吉城「開催の趣旨」

日本帝国の領域として北は50度線、南は赤道まで広域に広がっていた。今日本植民地の研究は台湾、樺太、朝鮮半島、満州、そして東南アジアの国々、南陽群島の占領地と委任統治のパラオなど、さまざまな分野で行われている。中でも台湾、朝鮮、満州は植民地政策的に密接な関係もあって、研究もその点を考慮すべきであろう。しかしそれは充分ではなかった。本シンポジウムでは最新の研究状況が分かるだけでなく、朝鮮と台湾の両植民地の比較研究が積極的に討論されることを期待する。これまでの多くの比較と題している研究書は比較のための著者の意見を出している。それはそれぞれの先行研究を踏まえた縦の研究とはいえるが、比較とは言い難い。このたび、台湾植民地研究会（代表は上野弘子）と合同で研究会を行うことは先端の研究成果をもってぶつけ合う出発であり、私はそれを強く期待する。このシンポには台湾、韓国、日本の研究者たちが参加する。短い期間ではあるが質の高いコミュニケーションや親睦も図れると思われる。

山路勝彦「植民地博覧会研究の方途」

「始政五年記念朝鮮物産共進会」と「朝鮮博覧会」の目的は、朝鮮統治の実績を見せることにあって、総督府主導による「近代」を展示することであった。朝鮮ではさらに、昭和15年に京城日報社主催による「朝鮮大博覧会」、昭和18年には大邱日日新報社による「興亜大博覧会」が開催されている。いずれも「国威発揚」を目的としていた。台湾では大正5年に「台湾勸業共進会」、昭和10年には「始政40周年記念台湾博覧会」が台湾総督府主催で行われた。いずれも南進基地としての台湾を意識した博覧会であった。植民地で開催された博覧会だけに、主催者の政治的意図ははっきりとしている。しかしながら、朝鮮や台湾での博覧会は多くの参観者を呼び込み、人々を熱狂させた。多くの出し物も登場し、このため観光産業も興隆し、いわば「祭礼空間」も登場した。ここでは植民地博覧会の歴史的意義を考察したい。

崔錫栄「朝鮮博覧会と近代的知の誕生」

本稿では朝鮮物産共進会と朝鮮博覧会から以下のような問題点を検討したい。

第一に、博覧会が開催された時点に注目したい。両博覧会の会期は9月11日から10月31日までであった。その間を両博覧会の会期が何かを意味するかを考察する。

第二に、日本が博覧会を開催した主な目的はいわば「日本版オリエンタリズム」のイメージを作り出し、人々に及ぼすようとしたが、その効果はどうであったかを農民の博覧会観覧記を資料として検討したい。

第三に、以上のような問題点に加わって、日本は博覧会という視覚的装置を通して結局何を伝えることができたのか。幾つかの展示館を選別してその構成方法を分析して博覧会の企画者の意図を考察してみたい。

上田崇仁「植民地朝鮮・『国語』教育に見られる特徴」

今回の発表では、教科書の中でも特に初習時期の教科書に焦点を絞り、その特徴と、全6期にわたって見られる変化と工夫について報告したい。教科書は新規に発行されるごとに、「皇民化」教育の深化という単純な理由ではなく、時事的な事件事故の反映、「国語」という言語そのものの変化の反映などもみられる。たとえば、従来朝鮮に存在しなかった新しいもの、新しい組織、新しい仕組みなどを、国語のみ与えていく。子供たちは、それを説明しようとする際に、母語である朝鮮語を使うことなく、国語を使わなければ説明できない状況に立たされるわけである。その状況を生活一般に敷衍しようとしていく過程が、教科書の変化から読み取れるのである。発表では、実際の教科書の変化を示しながら、その特徴的な変化と語学教育としての視点から、検討した結果をご報告したい。

上水流久彦「台湾の日本語教育世代にみる自画像形成の道具としての日本／日本語」

本発表では台湾の日本語を取り上げ、それがなお使用されることを植民地主義と関連して説明する問題点を指摘したい。植民地時代に日本語教育を受けた人々の戦後台湾で日本語を話す時、決して彼らの自己アイデンティティの形成において日本は不可欠な存在ではない。自分の学歴を誇る時に日本を出すこともあれば、違う要素を持ち出すこともある。話す相手や状況において、日本という要素を状況依存的に選び取っている。韓国やアメリカ、中国大陸、さらには学歴や経済状況、台湾国内の政治問題などの複合的な関係のなかで行われている。つまり、台湾の自画像成立における「日本」の利用は、ナショナリズム、資本主義、中華思想など様々な問題が関与する。

金秀姫「明治期における日本人の朝鮮出漁と漁村建設」

日本は1910年の韓国併合以後、日本農村の過剰人口を農業移民として朝鮮へ移住させ、農産物生産を増加させ、統治上、日本の農民の営農が朝鮮農民に模範になることとしての政策を取ったのである。漁業の移民も同じような理由から日露戦争以前から始まり、推進過程は複雑であった。しかし漁業は農業に比べ土地をめぐる争う必要もなく、漁場であればどこでも行ける機動性があった。漁業に必要な土地使用はなかったために、飲み水や食糧、燃料を求めて沿岸に上陸した時、日本人漁民と朝鮮人との間に衝突が起きたこともあった。製造場を必要とするカタクチイワシ漁業と潜水器漁業は朝鮮人の許可を必要とした。彼らは上陸し、礼儀もまもらず、中には朝鮮人女性の家をしきりにのぞいたり、窃盗したりするものもいた。タイ延縄漁、サワラ流網漁、鮫鱈網漁など朝鮮人と同一であったために、競争になり朝鮮人たちが日本人の漁業を妨害したこともあった。漁業をめぐる日本人漁民と朝鮮人との葛藤と調和を考察する。

西村一之「台湾における漁民の移動と漁撈技術」

植民統治期の「移動」は、より利用価値の高い漁場を探す、新しい生産の場を追求する手段である。大正末期に漁船数の増加に伴い、その漁場は次第に南下していく。その影響を受けて、総督府が関与して台北州庁が蘇澳において実施した日本人漁業移民事業の成功が持つ意味は大きい。

蘇澳での成功には基隆から日本内地への鮮魚輸送が可能であったという背景がある。しかし、蘇澳南方澳の移民村の漁民たちはさらに漁場を拡大、それが調査地である新港に、総督府が移住募集および運営を主導する移民村を形成させた。農業にくらべ、漁業においては、台湾住民による漁法と日本人漁民が漢人や先住民アミ男性に新しい技術を習得する場を提供することとなった。高い移動性を持った漁法を日本人漁民が盛んに行ったことが、彼らを受け入れる「移民村」を形成させたと言えるのではないだろうか。

木村健二「明治期日本漁民による朝鮮進出の背景」

日清戦争前、日露戦争を通して朝鮮に対する日本側の支配権が大きく変動し、そこで展開される日本政府の朝鮮出漁関係政策が日本漁民の進出にも影響を及ぼすことが考えられる。また汽船によるトロール漁業の導入といった漁業における資本主義化の進展とも対応する。朝鮮海域への出漁は、近代化以前の時期から始められていた。魚群を追い求めて朝鮮海域へ入っていった経験をバックにして、明治期にいち早く出漁を実行した事例が、随所にみられる。明治以降の漁業に現出した諸変化は、入会漁業に及ぼす規制の弱体化、競争捕獲による魚群の払底、漁場争論、そして汽船トロール漁業の導入などであって、そうした混乱・変動が、具体的に山口県の漁民を朝鮮海域へ出漁・移住させた。また捕獲魚類の販売ルートや漁民たちの消費物資の購入といった面に現出した諸変化についても考慮しつつ検討していく。

磯永和貴「熊本県の朝鮮・台湾移住者」

熊本県立図書館には、熊本県出身の朝鮮と台湾に戦前に移住した人々の2冊の名簿が所蔵されている。本報告ではこの2冊の名簿を利用し、地理学的な観点から朝鮮・台湾移住者の出身地・移住地・職業における共通点と差異について、以下の6点について検討するものである。移住者は、朝鮮・台湾のいかなる地域に住んでいるのか。日本からの地理的近接性の問題と都市部と農山村漁村部の分布状況などを検討する。移住者の出身郡の検討。熊本県の海外移住者は、同じ出身地の移住者が朝鮮・台湾で同じ地域に住んでいるか。移住者の職業の中でも商・工・農・漁業、特殊な職業にも注目する。朝鮮・台湾の移住地先を都市部と農山村漁村に分け、それらの職業構成の比較、出身地と職業の相関関係、出身地と職業の関係を検討する。

黄智慧「台湾引揚者のポストコロニアル状況について」

ここ20年、私は台湾の「殖民主側」におけるポストコロニアル状況を観察してきた。そのなかで、同じ植民期にいた台湾のひとびとのなかで、少数ではありながら、6%を占めた40万人の内地人、つまり「植民主側」もいた。そのような人々の存在に気づきながらも、引き揚げた後、日本各地に散在しているため、手ごかりは掴めなかった。2004年、筆者が台北の元昭和町(日本人の住む町)の木造建築の保存運動に加わってから、元昭和町の住民と交流をするようになった。それを通じて日本植民期にいた台湾の内地人の話しを多く耳にするようになり、はじめて彼らが経験したポストコロニアル状況の実態がわかってきた。少数の官吏や軍人を除いて、彼らの多くは移住して一生台湾で過ごしており、骨を埋めるつもりで台湾にやってきた。しかし、無残にも母国の戦争敗北に人生を大きく変えられた。そのような運命を受けた内地人がポスト・植民期においてどのように過ごしてきたのか? また、それがどのような文化的社会的意味を持つのかを考える。

第 8 回研究会
 日時:2008 年 5 月 31 日(土)
 14-17 時
 場所:東亜大 13 号館



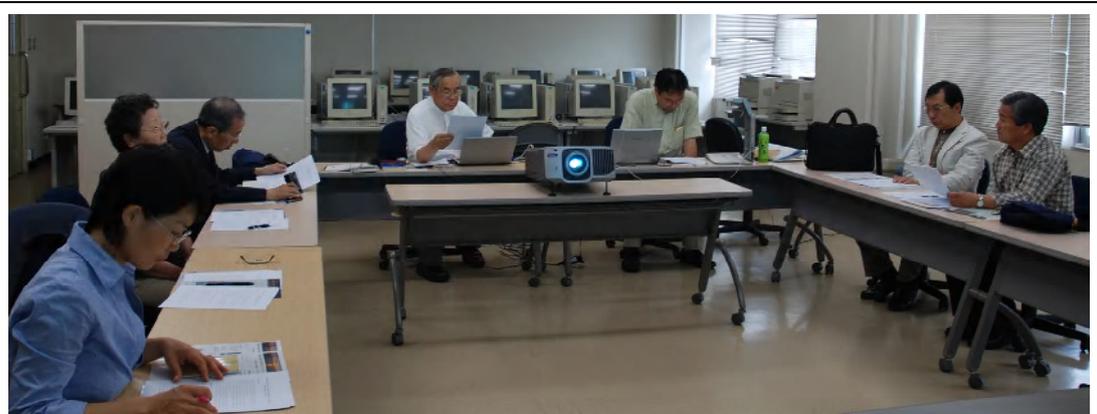
鄭氏(右)と通訳の李永松氏 白川氏 浦川氏



「植民地映像発見の経緯」……鄭琮樺（韓国映像資料院・研究員）
 北京の中国電影資料館の倉庫からで朝鮮映画のフィルム七本を発見した話
 「朝鮮海峡」鑑賞と評論 ……白川豊（九州産業大学・教授）
 朝鮮/1943/75分/DVD 監督:朴基采（パク・キチエ）出演:南承民、文芸峰、金信哉
 「植民地朝鮮の絵葉書」 ……浦川和也（名護屋城博物館・学芸員）
 その研究者から画像を観て解説を聞く

*写真は伊東雅之氏の提供

2008 年 6 月 3 0 日
 10-12:30
 東亜大学 13 号館 7 階
 韓国・檀国大学校の東洋学
 研究所の植民地研究（代表
 は姜在哲）の研究会
 発表者:
 姜在哲、上田崇仁、崔吉城



2008 年 3 月 31 日
 「西海観音敬徳保存会」(会
 長石橋弘) 主催によって会員
 が全国から 30 人弱が集
 まって慰霊祭が行われた
 (崔吉城撮影)



<新刊案内>

東洋拓殖株式会社『朝鮮移住手引草』明治 45 年 5 月増補第三版、(韓国・民俗苑で影印、20,000 ウォン)
 「朝鮮在住内地人戸数」(大正 6 年)「東洋拓殖株式会社移住民分布図」(大正 8 年)

研究組織	
研究代表	崔吉城（東亜大教授）
研究分担者	原田環（県立広島大教授）、木村健二（下関市立大教授） 鈴木文子（仏教大教授）、櫛田宏治（東亜大教授） 竹本正壽（東亜大教授）、上田崇仁（徳島大准教授） 磯永和貴（東亜大准教授）
外部協力者	北村皆雄（ヴィジュアルフォークロア代表）